

第1回 歴史文化基本構想と「雄大な自然と人の営みが生み出した景観」

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

益田市と益田市教育委員会は、全国に誇ることのできる市の歴史文化を後世に伝え、活用していくため、文化財の保護と活用のマスタープランとなる「益田市歴史文化基本構想」を策定することとしています（『第五次益田市総合振興計画後期基本計画』平成28年3月）。

この構想では、これまでの、国・県・市が特に重要であると認め、類型に従って指定する狭義の文化財だけではなく、指定には至らないものや従来の類型に当てはまらないものも広く文化財として捉えていくこととしています。その際は、それらを「相互に関連性のある一定のまとまり」として捉え、ストーリーを組み立て、文化財の魅力を高めるとともに、魅力的な形でわかりやすく価値を伝えるために、関連文化財群を設定することとしています。

本連載では、「益田市歴史文化基本構想」策定の過程で見えてきた市の歴史文化の特徴としての関連文化財群のテーマ案を紹介します。

その第一は歴史文化の基礎であり、全国の中でも卓越したすばらしい自然と景観をテーマとした「雄大な自然と人の営みが生み出した景観」です。

益田市は、眼前に広がる日本海、雄大な山々（恐羅漢山、大神ヶ嶽など）、そして清流日本一の高津川、

匹見川や益田川などの河川がおりなす複雑な地形の中に、すばらしい自然景観や天然記念物が存在します。美しい海岸線（土田、三里ヶ浜、持石、飯浦の各海岸や唐音の蛇岩、鑑崎など）、西中国山地国定公園にも指定されている匹見峡や双川峡などの溪谷、栃原の高野檜や若杉の天然杉、金谷の城山桜などの巨樹があり、これらは見る人の心を奪います。

そして、そのような自然と長い歴史の中で、人々が営んできた景観にも見るべきものが多いです。津田、木部や飯浦などの湊町の景観、中垣内・大神楽の棚田や三葛・澄川などの農村・山村景観、益田の七尾城下や高津柿本神社の門前町などのまち並み景観、各地に見られる赤瓦の景観などは、益田ならではの景観であり、郷愁をかき立てます。

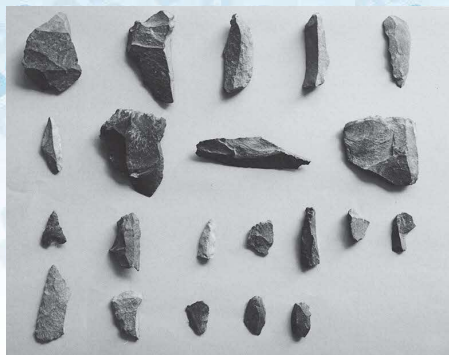


大神ヶ嶽（益田市指定史跡および名勝）の立岩。益田市匹見町紙祖（三坂地内）。標高 1,170 m の大神ヶ嶽は古来修験道の聖地として信仰の対象でもありました。

第2回 匹見の落葉広葉樹林帯と縄文遺跡群

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623



新槇原遺跡出土の石器



石ヶ坪遺跡出土の並木・阿高式土器

一般に西日本の植生は照葉樹林帯に分類されますが、標高の高い匹見には今も昔も落葉広葉樹林帯が広がっています。前者よりも後者の方が、ドングリ類など食用にできる木の実が豊富であり、それを求めて小動物が集まるなど縄文時代の人々にとって、匹見は生活しやすかったようです。

匹見の歴史は縄文時代より前の後期旧石器時代（およそ3万5千年前から1万2千年前まで）にさかのぼります。最古の遺跡は約2万年前の新槇原遺跡（道川）で、県内の同時代を代表する遺跡として、県の史跡に指定されています。続く縄文時代（およそ1万5千年前から2400年前まで）になると遺跡数が増加します。上ノ原、神田、ヨレ、イセ（匹見）、水田ノ

上、石ヶ坪、中ノ坪（紙祖）、蔵屋敷田、田中ノ尻、上家屋（道川）、アガリ、山崎、田屋ノ原（澄川）、沖ノ原、芝（広瀬）、広戸（石谷）など場所や性格、時期などバラエティに富んでおり、縄文時代の匹見の人々の生活の様子を知る上で、大変貴重な事例となっています。

それぞれに特徴的な配石遺構があったり、出土品には広島県冠山産安山岩のほか、大分県姫島産黒曜石で作られた石器（イセ・ヨレ遺跡など）、新潟県糸魚川産の翡翠製棗玉（水田ノ上A遺跡）、九州系の並木・阿高式土器（石ヶ坪遺跡）など、広い地域との交流をうかがわせるものがあつたり、その見どころは多く、匹見を「西日本の縄文銀座」などと呼ぶ人もいます。

第3回 海から仰ぎ見る巨大古墳群

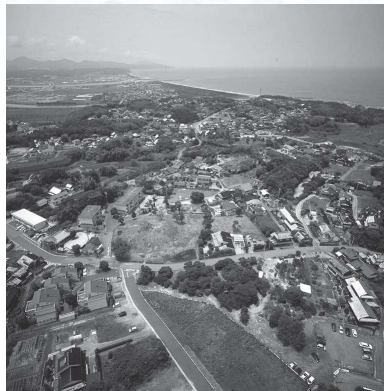
【問い合わせ先】市文化財課 ☎ 31-0623

弥生時代以降、稲作が広まり、人々が定住するようになると、まとまった集団が形成されるようになり、そしてその指導者が豪族（こうぞく）となっていくます。益田平野には有力な勢力がいたようで、乙吉（おとしよし）・下本郷から鎌手あたりまでの連続した台地上に、彼らの首長の墓と考えられる古墳が残っています。

その中でも古いものが四塚山古墳群（下本郷町）で、団地造成時に、前期古墳（4世紀）を象徴する三角縁神獣鏡（さんかくふちしんじゆうきょう）が発見されました。続く4世紀後半築造の大元古墳群（県史跡・遠田町）は、1号墳が全長86mの前方後円墳で、現時点では石見地方最大の古墳です。

国の史跡となっている5世紀築造のスクモ塚古墳（久城町）は、古墳時代中期を代表する大型古墳です。造り出し付円墳（直径57m）とする説と前方後円墳（全長100m）とする説がありますが、いずれにしても県内でも屈指の大きさを誇ります。

6世紀築造の小丸山古墳（市史跡・乙吉町）は全長52mの前方後円墳で、周囲に溝と外堤を備えた石見地方唯一の形態をしています。



史跡 スクモ塚古墳（写真は島根県埋蔵文化財調査センター提供）

6～7世紀には鵜の鼻（うのはな）に相次いで古墳が造られ、かつて50基以上の小円墳（直径10m以下）がありましたが、現在でも約30基の古墳が残っています（鵜の鼻古墳群（県史跡・遠田町））。

これらの古墳はいずれも海が見えるところに造られています。また大元1号墳は海側の地山斜面（じやま）を利用して造られ、海側の古墳側面の葺き石（ふきいし）をより丁寧に積んでおり、海から見て大きく、立派に見えるように造られているという特徴があります。

このことは、これらの古墳が日本海を意識して、あるいは日本海から見られることを意識して造られたことを示しており、これらの古墳を造った勢力が、日本海との関わりが深かった可能性を示しています。

第4回 1000年の歴史を誇る都茂鉦山と古代官衙群・式内社

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

日本の古代国家が、中国にならつて律令という法律による統治制度を導入すると、全国に70弱の国が設置され、現在の島根県西部は石見国となりました。

各国は複数の郡で構成され、現在の益田市に相当する地域は美濃郡とされましたが、当初は現在の鹿足郡（津和野町と吉賀町）も含む、かなり巨大な郡でした。それは、現在の益田市域にかなり巨大な豪族がいたことを示しています。鹿足郡は承和10（843）年に美濃郡から分割して設置されました。このとき分割された郡の境界が大境（安富町・横田町）であるといえます（郡域は後に変遷します）。

仁寿4（854）年、美濃郡で醴泉（甘い味のする水）が出て、とてもめでたいこととして斉衡元年に改元されました。この醴泉が養老滝（美都町宇津川）であるといわれます。

元慶5（881）年、美濃郡都茂郷丸山で銅が産出されました。これが昭和62（1987）年の閉山まで1千年以上の歴史を誇る都茂鉦山の始まりです。東仙道には、古代の官衙（役所）跡と推測される酒屋原遺跡や役人の居住集落跡と考えられる下都茂原遺跡がありますが、これらも都茂鉦山との関係が推測さ

れています。

このほか、安富町の中小路遺跡などが古代官衙跡と推測されています。

延長5（927）年に編纂された「延喜式」には、諸国の神社の名

前が記されており、そこに見える神社を「式内社」といいます。美濃郡五座として、菅野天財若子命神社、佐毘売山神社（乙子町）、染羽天石勝命神社（染羽町、染羽天石勝神社）、櫛代賀姫命神社（久城町、櫛代賀姫神社）、小野天神のたそあずわこのみこと之多初阿豆委居命神社（読みは一部推定）が挙げられています。菅野：には戸田町の小野神社とされていますが、近年は横田町の豊田神社とする説もあります。また、佐毘売山神社は都茂鉦山の技術者が信仰したと考えられています。

これらの文化財や神社から古代の益田の様子を知ることができます。



式内社の一つ、佐毘売山神社
（現在の読みは「さひめやまじんじや」）

第5回 益田氏と雪舟が作りあげた「中世文化の薫るまち」

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

今から800～400年前の益田では、領主益田氏が幕府や周辺の大名からも重視される活躍を見せ、その遺産が現在も益田には息づいています。

益田氏の居館^{みやけおどい}三宅御土居と居城七尾城の遺跡はそろって良好な状態で残り、あわせて益田氏城館跡^{じょうかんあと}として史跡に指定されています。益田地区には、当時、益田氏の城下が広がり、現在もその名残を多くとどめています。重要文化財の万福寺^{まんぷくじ}本堂、染羽^{そめは}天石勝神社本殿をはじめ、医光寺^{いこうじ}総門などのゆかりの寺社の建造物、また当時の町割りも色濃く残っています。

そして特筆すべきは、室町時代のみならず日本の文化史を代表する画僧^{えしゆ}雪舟との関わりです。室町時代の益田氏当主兼堯^{かねたか}は、雪舟を益田に招き、雪舟は兼堯の肖像画を描き、また庭園を築いたといい、それが重要文化財の益田兼堯像であり、史跡および名勝の万福寺庭園と医光寺庭園です。この2つの庭園は山口市の常栄寺庭園、福岡県添田町の旧亀石坊庭園とともに「雪舟四大庭園」と呼ばれています。

また、益田市内には、中世の時

代の山城や古文書、仏像・神像が数多く残っており、益田氏だけではない、中世益田の多面的な様相も次第に明らかになってきています。鎌倉時代の益田氏は東仙道を本拠としていたと考えられており、実際に東仙道土居遺跡からは南北朝時代の石塔群が発見されました。高津川下流域には莊園^{しょうえん}長野庄が成立し、横田町や本俣^{ほんまたが}賀賀町のあたりには内田氏とその一族俣賀氏^{やすどみ}が、安富町のあたりには安富氏が割拠し、ゆかりの寺社や古文書が残っています。

このほか、古文書では、「紙本墨書^{しほんぼくしよ}原屋家文書」、「梅津文書^{うめづ}」、「原馨氏所藏増野家文書^{まし}」、「妙義寺文書^{みょうぎ}」「萬福寺文書」など、全国的に見ても貴重な古文書が残ります。山城では、市史跡の横山城跡、向横田城跡、基盤嶺城跡^{こばんだけ}、小松尾城跡^{こまつお}、叶松城跡^{かのうまつ}、道川城跡、四ツ山城跡^{まるも}、丸茂城跡をはじめとして約90の山城跡が各地に残ります。



紙本墨書益田兼堯像
(雪舟筆。重要文化財)

第6回 日本海に漕ぎ出した益田の人々

【問い合わせ先】

市文化財課 ☎ 31-0623

益田の人々は、縄文の昔から日本海に舟を漕ぎ出し、国内外の様々な地域と交流・交易を展開していました。

匹見の縄文遺跡群からは、大分県姫島産の黒曜石製の鏃や新潟県糸魚川産の翡翠製・碧玉などが出土しています。すでに当時の益田がこれらの地域と交易により結びついていたことを示しています。沖手遺跡（久城町）の縄文時代晩期の地層からは、丸木舟が出土しました。この丸木舟が実際に日本海を渡ったかはわかりませんが、当時の益田の人々がその手段を持っていたことは確かです。

豊田神社（横田町）の奥の院石塔寺権現から出土した陶製経筒五口や、東仙道土居遺跡（美都町仙道）から出土した四耳壺からは、中世前期の中国との交易による結びつきがうかがわれ、これらと同時代の交易拠点であったと考えられる沖手遺跡成立の背景として注目されます。また、兵庫県の六甲や福井県の日引などからもたらされた中世の豊富な石造物は、益田が交易の重要拠点であったことを示しています。

これら縄文以来の日本海・東アジア交易の流れを汲み、益田が大きく繁栄したのが中世益田氏の時代で

す。益田氏は研究者から「海洋領主的性格」が指摘されていますが、それを証明するかのように、日本の中世の港町の遺跡を代表する中須東原遺跡（中須町）が発見されました。同遺跡は遺構・出土品ともに全国屈指の内容を誇ります。益田氏の「海洋領主的性格」は、益田の人々の積極的な交流・交易に支えられたものと考えられています。

そして、それらの交流や交易は益田氏が去った後も続き、西廻り航路の盛況の中で、今市（乙吉町）が繁栄したほか、高津や飯浦が津和野藩の重要な港に位置づけられました。



ちょうちん たいりょうき かいてんま
提灯と大漁旗をつけた櫓伝馬船とご神船が、男衆のかけ声とともに高津川に漕ぎ出す船神事「ホーランエー」。豊漁・安全祈願とも、北前船を迎える様子を再現したともいわれます。

益田市の歴史文化の特色（全7回）

最終回

民衆の生活とともにあり、 今も息づく益田の芸能

■ 市文化財課

☎ 31・06623

益田市内では、神楽をはじめ、
地芝居^{じしばい}、囃子田^{はやしだ}（田植え囃）、獅子
舞など、個性豊かな芸能が民衆の
生活とともにあり、それは現在も
人々の暮らしとともに息づいてい
ます。

島根県の無形民俗文化財に指定
されている三葛神楽^{みかづら}はゆったりと
した六調子打ち切りという形式
で、石見地方の六調子系の粗型を
伝承しています。

高津川流域では地芝居も盛んで
した。中垣内町の白岩神社の廻り
舞台は県内においても例が少な
く、「うつうた一座」の舞台として
実際に使われていることも含め、
貴重です。

豊作を願う神事から鑑賞芸能へ
と派生した囃子田が市内各所に継
承されており、道川や内谷のもの
は、それぞれ特徴は違うものの、古
い型を残しています。また、土佐^{とさ}
本田植哥草紙^{ほんたうえぐさ}は、中国山地の田植
歌の古い形を記録したものとして

注目されます。

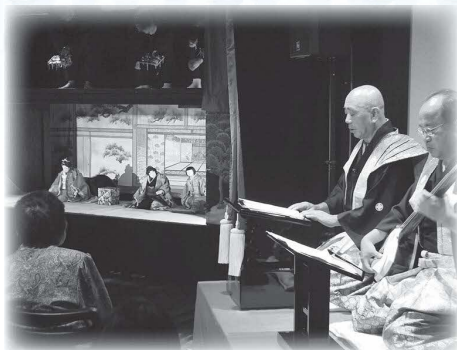
獅子舞も古い獅子頭が各地に残
されており、各地の神社で興行さ
れていたと見られます。

益田糸操り人形は明治時代に益
田に伝わったものですが、四^よ目
と呼ばれる手板を使う操演方法が
古い形態をとどめているとされ、
近年は海外公演を成功させるな
ど、注目が高まりつつあります。

これらの芸能は、歴史上のもの
ではなく、現在も市民の生活の娯
楽として息づいていることが何よ
りも貴重です。

※本連載および特集では紹介でき
ませんでした。このほかに祈
りと甲子をテーマにした関連文
化財を設定する予定です。

※1月号からは、「益田市の文化財
の紹介」を掲載します。



益田糸操り人形の公演の様子



雪舟が築いた万福寺庭園(史跡および名勝)

◆益田市歴史文化基本構想

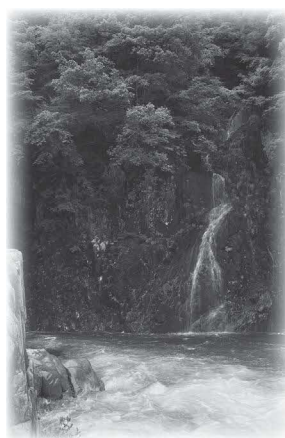
益田市では、益田市の豊かな歴史文化を後世に確実に伝え、活用していくための基本方針となる益田市歴史文化基本構想(以下、「構想」)を今年度策定することとしています。このため、平成23年度から皆さんの協力を得て、市内の歴史・文化・自然に関する様々な遺産を把握する調査を進めてきました。また、益田市歴史を活かしたまちづくり検討委員会において構想の内容を検討してきました。

◆益田市の歴史文化の特色

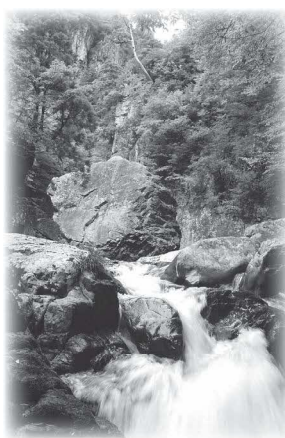
構想の策定にあたって、益田市の歴史文化の特色はどのようなものであるかを考えてきました。

益田市は歌聖・人麿、画聖・雪舟それぞれのゆかりの地であり、近年は中世の領主益田氏も大きく注目されるようになりました。また、美都の都茂鉾山は国内の鉾山で最も長いと言える歴史を持ち、匹見の縄文遺跡群は西日本随一の内容を誇ります。

歴史以外にも、西中国山地、清流高



表匹見峡・小沙夜淵



裏匹見峡



高津川と飯田吊橋

津川・匹見川、日本海の美しい自然は全国屈指と言えます。また、長い歴史の中で人々によって連綿と育まれてきた文化的な景観にも素晴らしいものがあります。

構想ではこのような歴史文化の特色を、いくつかの魅力的な物語にまとめています。それらは、これまで『広報ますだ』の連載「益田市の歴史文化の特色」(平成30年6月号)でも紹介してきましたが、本特集では江戸時代以降のものを紹介します。



都茂鉾山の大間歩跡



現時点で石見最大の前方後円墳・大元1号墳(県史跡)



蟠竜湖疎水。岩盤を約200mくり抜く大変な工事でした。



飯浦と津和野藩の鉱山を結ぶ街道の痕跡を示す美濃の一里塚。

◆幕府領・津和野藩領・浜田藩領の境界の地

江戸時代の益田は、江戸幕府の直轄領、津和野藩の領地、浜田藩の領地に分割され、さらにそれらは複雑に入り組んでいました。

そのため、各領域をつなぐ街道として、沿岸部の山陰道と山間部の津和野奥筋往還をはじめ、沿岸部と山間部をつなぐ街道が整備されました。これらの街道の痕跡として、各地に石畳の跡



石州口の戦いの戦端が開かれた扇原の関門

や藩の境を示す藩境石が残るほか、美濃地町には一里塚も残っています。

一方で、境界の地であるがゆえに、幕末の石州口の戦いでは、多田町の扇原の関門は戦場となりました。

また、この時代、様々な人々の活躍により産業が大きく発展しました。高津の沖田では、長嶺嘉左衛門が蟠竜湖疎水を開通させ、荒地の開発に成功します。遠田の国東治兵衛は、い草の栽培と畳表の製造を導入し、特産品として根付かせました。他にも、喜阿弥焼や白上焼、石州瓦などの窯業、山間部でも鉱山開発やたたら製鉄、林業など、様々な産業が発展しました。

◆柿本人麿の伝承と信仰



松崎に人麿を祀る神社があったことを示す松崎の碑。

益田市には、万葉の歌聖・柿本人麿がこの地で亡くなったとする伝承があり、その死去地として有力視されています。また、戸田を生誕地とする伝承もあるなど、人麿にまつわる伝承が多く残されており、市民は人麿を「ひとまるさん」と親しみを込めて呼んでいます。

人麿が高津で亡くなったとする見方は、中世の時代には確認できます。中央の著名な文化人が「たかつの人丸」に歌を寄せるなどしています。この頃の社は、松崎にあったと考えられています。

1681年、この社は津和野藩主亀井茲親により現在の高津柿本神社の地に移転再建されます。現在の本殿は1712年に建造されました。全国の人麿を祀る神社の本社と言われます。



人麿出生地の伝承を持つ戸田の柿本神社

一方、戸田の柿本神社は724年の人麿没後にこの地に創建されたとい、代々綾部氏が宮司として社殿を守ってきたといえます。人麿の母はこの綾部氏の娘だと、この柿本神社の由緒は伝えています。

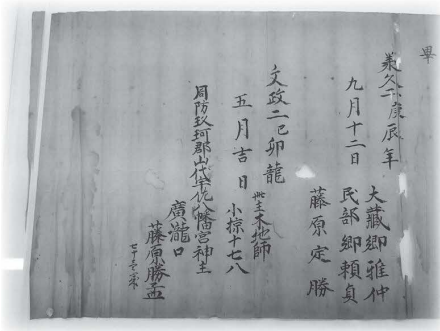
人麿の生誕伝承は、全国的に見ても他にないものです。現在の本殿は、1822年に亀井茲尚により創建され、あわせて人麿童子像が寄進されました。周辺には御廟所（遺髪塚）、足形石、伝承岩など人麿の伝承に関わる文化遺産が伝わりまます。

◆ 豊富な山林資源と

清流高津川・匹見川の恵み

市域の約85%、美都や匹見では約95%を占める林野は、豊かな恵みをもたらし、かつては1万人以上の人々が山林資源を糧に生活をしていました。たたら製鉄は、大量の木炭が必要なことから、山中に多くのたたら場が設けられました。たたら場で働く人たちが信仰した金屋子神の祈祷書も残っています。

また、匹見は木地師や杣人の里として繁栄しました。木地師は轆轤師ともいい、轆轤を用いて椀や盆などの木地の器を作りました。匹見には木地師の墓や轆轤などの道具、権利を主張するための文書など、木地師に関する文化遺産が豊富に残されています。



木地師がその権利を主張するために用いた小川家木地屋文書(市古文書)



横田中学校の校庭に隣接する水神の森



匹見のわさび田。かつて「東の静岡、西の島根」と名を馳せていました。



東仙道開拓団の碑。開拓団の経緯や団員の名が刻まれています。



益田川災害復旧竣工記念碑。水害から復旧工事までの概要が記されています。

◆ 戦争・災害・過疎と向き合った歴史

た歴史

近代以降、益田も様々な苦難に直面します。

戦争では益田の人々も出征し、尊い命を落としました。戦争で亡くなった人々の慰霊碑が市内各所に建てられています。東仙道や真砂から満州開拓団が派遣されましたが、敗戦により開拓地を失い、大変な危険を冒して帰国せざるを得なくなりました。

高津川・匹見川や益田川は、多くの恩恵を与えてきた反面、歴史上、幾度も水害を引き起こしてきました。近代以降では特に、昭和18年、47年、58年に大規模な水害が発生し、いずれも甚大な被害をもたらしました。

また、昭和38年の豪雪では、山間部の集落が長期間孤立する状態に陥りました(38豪雪)。

昭和30年代後半からのエネルギー革命や、生活様式の欧米化などによって、炭焼きや林業などの山間地産業が不振となりました。これに38豪雪が追い打ちをかけたかのように、匹見では人口減少が急速に進みました。地域によっては挙家離村が相次ぎ、50%近い減少率となりました。

このような苦境にあつて、当時の大谷武嘉匹見町長は「過疎」の問題を積極的に発信したほか、多くの人々が「村おこし」に真剣に取り組みました。

このように振り返ると、益田の歴史文化の豊かさにあらためて気づくとともに、現在の益田を輝かせるヒントを得ることができます。近代以降の苦難も、人口減少社会に突入し、災害が頻発する現代日本にとって得がたい経験と教訓を与えてくれるものです。